

烈海王ツツツ神様転生ツツツ！！！！

烈海王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様転生杯に参加しようと思ったけど、オリ主限定なので参加できないことに気づいた没作品。

烈海王
ツツツ
神様
転生
ツツ
!!!

目次

1

烈海王ツツツ神様転生ツツツ!!!

——斬られたら、そこで終わるのか。

果てのない武の道を歩む、烈海王はそんな疑問をずっと持っていた。

刃が身を切り裂き、食い込んだとして——反撃は不可能なのだろうか。

……否、と烈は考えていた。首を撥ねられぬかぎりには、十分に攻勢に転じることが可能だと。肉を切らせて骨を断つことができる。そう信じ込んでいた。

愚かな妄信だった。

古の劍豪——宮本武蔵。

かの刀使いが放つ斬撃は、あまりにも速く、鋭く、強く、そして——痛すぎた。

肉を切らせて骨を断つ？

現実には——ただ無様に、肉を斬り払われ、背骨を切断された。世界が遠く感じた。

立ち上がることもできず——ただ、意識が薄れていった。

……次に活かせる。

そう思い——

想い——

そして——

「——ツツツ!?!」

覚醒とともに、烈は跳ね上がった。

いや——跳び下がった。後方へと。

魔拳、烈海王らしからぬ反応であった。驚き、戸惑い、慌てて距離を取るなど。

だが——それも致し方ないことだったろう。

あの地上最強の生物、範馬勇次郎でさえ——もし同じ状況に陥れ

ば、烈と同様の動きをしていたかもしれぬ。

「キサマ——」

烈はようやく言葉を発した。

抑えきれぬ困惑を抱きながら——

「ここは——どこだツツツ!?!」

——日本の建築物と思わしき、茶の間。

畳の敷かれた部屋は、日本での滞在が長い烈にも馴染みがあるものだった。

そして、ちやぶ台を前にして座っている——眼鏡をかけた六十歳ほどの男性。

おそらくは日本人だろう。

和室にいる……日本人。

違和感は——ない。

だが——

(俺は……地下闘技場にいたはずだツツツ)

烈は武蔵と闘い、そして負け——最後の記憶はそこで終わっていた。

もし意識を失ったあと、医者による救命がおこなわれたとしても——

いるべき場所は、病室のベッドの上だろう。

そう、原人ピクルに右足を喰われた……あの時のように。

だが、現実はどうだ。

こんな日常的な空間で——烈は目を覚ました。

場所が奇妙すぎる。

こんなところにいるのは、道理に合わない。

だが——それ以上に不可解なのは。

(……無傷……だと……)

眼前の男を警戒しつつも、烈は自分の腹に目を向けた。

普段着としている唐装^{チャイナ服}。

その下の生身は——明らかに無傷の感覚だった。

五体は万全であったのだ。

そう——五体が……欠けることなく、ある。

ある……失ったはずの、右足さえもッ！

なまじ自然すぎて、今ようやく気づいた有り様だった。

「ばか……な……こんな……なぜ、わたしは……」

「——烈海王」

動揺をあらわにする烈に対して——はじめて眼前の男は声をかけた。

落ち着いた声である。

事態を把握していない烈とは違い——彼は状況を理解しているようだった。

名を呼び、何を話すつもりなのか。

烈は警戒を保ちつつも、男の次の言葉を待った。

そして、次に目にした光景は——

「——すまなかった」

——ちやぶ台に手をつき、深々と頭を下げた。

謝罪。

己の非を表明し、許しを請う言動。

——意味も、意図も、まったくわからないものだった。

「……なぜ、わたしに謝る」

「俺のせいだからだよ。お前が死んだのは」

「死——死ん、だ？ わたしは……生きているが……」

「死んでいるのさ、烈海王は。……ここは死後の世界で、俺は『神』だとでも思ってくれ」

「……」

くだらん。

——と、平時なら烈は吐き捨てていただろう。

だが——今は、あまりにも状況が奇怪すぎた。

致命傷を受けて、死後の世界へと旅立った——それを頭から否定することはできない。

だが、疑問も大きかった。まず烈が気になったのは——

「……わたしは、あなたに殺されてなどいないが」

宮本武蔵。

クローン技術で現代に蘇った彼に、烈は文字どおり真剣勝負を挑み、そして敗北し殺されたのだ。

つまり死んだのは——武蔵のせいだった。

この男のせいではない。

辻褄が合わなかった。

「……最初は、本部以蔵のつもりだった」

「なに……？」

「武蔵を出すなら、誰かを斬らせきやいけない。だから最初は、以蔵を犠牲にするつもりだった。けどな、以蔵が本当に守護まもったほうが——『面白い』と思ったんだよ」

——言っている意味がわからない。

それが烈の感想だった。なぜ本部以蔵が出てくるのか。そして斬らせるとは？ まるで、この男が武蔵を操っているかのような言い草ではないか。

この男は——何者だ？

……神？

ばかな、そんなものを……簡単に認められるはずが、ない。

「——泣きながら、烈を宮本武蔵に斬らせた」

「……………」

烈は男を睨んだ。

歳を取っているが、体つきは貧弱な様子がなかった。若いころは肉体を鍛えていたのだろう。もしかしたら——ボクシングなどをやっていたのかもしれない。

格闘技も嗜んでいた神様など、不可思議極まりない話ではあるが。

「仮に……あなたが神だったとして」

鋭い眼光を保ちながら、烈は問いかける。

「——何が目的だ？」

そう、それが重要だった。

これが荒唐無稽な夢だという可能性もあるが、ひとまず置いておこう。

男の言い分が間違っていないとして――

「――死んだわたしに、何を求めると云うのだ」

まさか、ただ歓談しようなどという動機ではあるまい。

烈はまっすぐと男を見据えた。まともに答えないようであれば、多少の暴力でさえも辞さないつもりである。

殺気立つ烈を目にしても、男は焦燥ひとつ見せず――ゆっくりと口を開いた。

「――新しい世界に降り立ってほしい」

「……なん、だと？」

「異世界だ。つねに勝負していく、挑戦していく――それが俺の『作風』だ。だから……お前を転生させたい」

「………」

烈は奇妙な表情をした。この男は、完全に自分を『神』だと信じている様子だったからだ。

彼の発言を真に受ける前に――烈は足を動かした。

戸口のほうへ。

部屋の外へ。

室内を抜け、建物を脱出すれば――日常の現代日本社会が存在するのではないかと。

そんな一縷の、一抹の、些細な願いを抱いて――烈はそこにあった障子を開いた。

「……ッ」

――現実とは、現実ではなかった。

そこにあるのは、ただ白の空間であった。

障子を開けた先は、何もない白い虚無が広がっている。飛び込めば、いつまでも、永遠に、際限なく墜ちていくような――異空間が広がっていた。

この茶の間は、切り取られていた。

脱出は――できない。……烈海王には。

「――信じる気になったか？」

「……少しは」

障子を閉じ、烈は男のもとへ戻った。

そして、ちやぶ台を挟んで対面に座る。

男とコミュニケーションを取らねば——何も始まらない。

烈はそう判断したのだった。

「……異世界で、赤子からやり直せと。そう命令しているのか？ あなたは」

「ちよつと違うな。姿かたちが変わったら、烈海王は烈海王じゃない。

……その姿のまま、行ってもらおう」

「……………」

「そして……『特典』も付けてやろう」

「……特典、だど？」

烈は顔をしかめた。

自称神の言う、特典。

何らかのベネフィット、ということだろう。

だが——訳も分からぬ相手から贈り物を与えられて、烈は喜ぶような性格ではなかった。

もし、超常的な力でも押し付けようものなら——怒鳴りつけるつもりでいた。嘗^なめるな、と。

生^きのまま自分ならばともかく——他者からもたらされた能力で生きて、何になるうか。

他人にも厳しく、自分にも厳しく——烈海王とは、そういう人物であつた。

「……強いやつを用意する」

ぽつりと、呟くように男は言い放つた。

「地上最強の生物、1億9000万年前の原人、江戸時代から蘇った剣豪……それに匹敵するような、強敵。それを用意してやる」

「……………」

「時期は言えないが……烈という人^{キャラクター}物の前に、かならずそれは立ちはだかる」

「——それが転生の特典だど？」

険しい目つきで尋ねた烈に対して、男は頷いた。

敵をけしかけることが特典、などと宣のたまっているのだ。

普通の人間ならば、それが「特典」などとは思わないだろう。

だが——烈海王は尋常ならざる武人だった。

鍛えられた肉体は、培われた技術は、人類の最高峰に近い水準に達しており——

苦戦するような敵を見つけることすら、困難だった。

『——敗北を知りたい。』

脱獄した死刑囚たちが、そう言つて日本へとやってきたことを思い出す。

烈にも、その気持ちは理解できた。強すぎると、勝利がたやすく手に入つてしまうのだ。

そんな簡単な勝利に——満足感を得られるはずもない。

強い相手と戦いたい。

敗北をもたらししてくれるような——強敵と。

どこまで自分の武が通用するのか、試したいのだ。

そして——さらに自分を高めへ、山の頂上へ。

「オーガ」範馬勇次郎。

「原人」ピクル。

「劍豪」宮本武蔵。

そのような生物として究極の存在と、自分の全力を出しても勝てるかわからぬ相手と、ふたたび比ちからくらべ武ができるのならば——

「烈海王」

男は——

いや、神は言った。

「お前の答えは？」

きつと、彼はわかつていたのだろう。

烈海王ならば、どう答えるのか。

ほかに道もなく。

なれば、ただ愚直に突き進むのみ。

幾度となく口にした言葉。

それを、烈海王は——はっきりと伝えた。

「わたしは一向に——かまわんツツ！」